

なっちゃんのおまじない

高橋 高橋一(たかはしはじめ)24歳。職業WEBライター。俺は都市伝説なんかのオカルト記事を書いている。

最近ネットで流行り出した都市伝説がある。

とある児童文学のシリーズに載っている「おまじない」を行うと神隠しに遭うらしい。

しかも神隠しに遭った人物の存在はみんなの記憶から消えるというもの。

ネット発の都市伝説は大体出どころが特定されている。

だが、今回の都市伝説は同時期に複数の投稿者が出現した。

児童文学の「おまじない」がきっかけのため、投稿者はいずれも学生だった。

「おまじない」に何か秘密があるのではないかと踏んだ俺は、作者への取材を申し込んだ。

-ノック-

高橋 失礼します。

はじめまして。WEBライターの高橋一です。

本日はお時間をいただきありがとうございます。

八雲 はじめまして。八雲(やくも)です。

どうぞお掛けください。

高橋 失礼します。

早速ですが、八雲先生、ミリオンセラーおめでとうございます！

今や「なっちゃんのおまじない」シリーズは全国の小学生が競って読む超人気作ですよ。

1作目からこんな短期間で児童文学の名作に名を連ねるとは、さすが先生です。

八雲 ありがとうございます。作品が多くの子どもたちの目に触れて私も嬉しいです。

高橋 「なっちゃんのおまじない」シリーズは私も全作品拝読しました。大人でも引き込まれるストーリーで、夜更かししてまで読む子どもたちの気持ちがよくわかりましたよ。

八雲 それは良かった。どうすれば子どもたちに楽しんでもらえるのか、悩んだ甲斐がありました。

高橋 ストーリーもさることながら、新作の出版の速さも人気の一つなんでしょうね。

八雲 飽きさせないためには、新しい作品が必要ですからね。子ども心を掴んでおくのに必死ですよ。

高橋 子ども心といえば、作品ごとに登場する「おまじない」は面白いですね。

私も子どもの頃にコックリさんやトイレの花子さんと呼び出す方法が流行っていたので、何だか懐かしくなりました。

「おまじない」の効果や方法は作品ごとに異なりますが、最後の呪文はシリーズを通して同じなんですね。

八雲 ええ。最後の呪文が鍵になっているので。

高橋 私には理解できなかったのですが、呪文には何か意味があるのでしょうか？

八雲 さあ、どうでしょうか？

高橋 …。

八雲 何か？

高橋 先生は「なっちゃんのおまじない」シリーズのとある都市伝説をご存知でしょうか？

八雲 都市伝説ですか？

高橋 「『なっちゃんのおまじない』シリーズの『おまじない』を試した子どもが神隠しに遭う」との都市伝説です。

八雲 「なっちゃんのおまじない」シリーズはオカルト要素がありますからね。想像力の豊かな子どもたちの間では、そういった都市伝説が流行るのでしょうか。

高橋 たしかに子どもたちの間で流れている噂ですが、全国の子どものたちの間で同時期に噂が流れ始めたんです。

私は作品内に関連する描写があるのかと思いましたが、どの作品にも失踪や紙隠しに関する描写はありませんでした。

となると、噂の出どころは一体どこなのでしょう？

八雲 今は子どもたちの身近にインターネットがあるので、噂の拡散が早いのでは？

高橋 インターネットで拡散されたにしても、発信者がいるはずですよ？

八雲 発信者を特定できたのですか？

高橋 はじめは作品の認知度を広めるために、八雲先生の関係者が都市伝説を作り上げたのかと思いました。

SNSの投稿を基に調査した結果、実際に神隠しを目撃した児童を特定することができました。

八雲 へえ。それは面白い。

高橋 全国各地の複数人の児童に実際に会って詳細を聞いたところ、全く接点のない子どもたちがほぼ同じ証言をしたんです。

「『なっちゃんのおまじない』シリーズの『おまじない』を友だちと試したら、友だちが目の前から消えた」と。

複数人で「おまじない」を試し、投稿者以外の子が全員失踪したケースもあるようです。

八雲 それが事実であれば今頃大騒ぎになっているのでは？

そのようなニュースは見た覚えはありませんが、失踪した子どもは存在したのですか？

高橋 …いいえ。失踪した子どもたちを特定することはできませんでした。

周りの大人も子どもたちの話に耳を傾けなかったようです。

八雲 やはり子どもたちの作り話ですよ。

高橋 しかし、どの子も失踪した子に関する証言が詳しすぎるのです。

名前や見た目、住んでいる家や家族構成など。

実際、失踪した子の家族とされる家庭の家族構成は証言と一致していました。

八雲 どこかでその家族の話を聞いただけでは？

高橋 中には、失踪した子の家に遊びに行った事があると証言した子もいました。

失踪したとされる子の家族にも確認しましたが、その子とは面識がなく、家に上げた覚えもないとのことでした。

にも関わらず、家の間取りや家具の配置が証言と一致した。

唯一証言と異なる点は、失踪した子の部屋や所有物が一切無かった点です。

八雲 どうして訪問したことのない家の内部を知っていたのかは不明ですが、失踪したとされる子どもは存在していないのでしょうか？

高橋 どの家族も、失踪した子はいないとの回答でした。

八雲 では、何の問題があるのですか？

高橋 …どうして先生は「失踪した子どもが存在したのか」と質問されたのでしょうか？

八雲 何かおかしい点でも？

高橋 まるで、失踪した子どもは存在自体が消えることをご存知なのではないかと。

八雲 うーむ…。つまり貴方は、私が本に書いた「おまじない」で子どもが神隠しに遭い、存在した痕跡全てがこの世から消え去ると？

高橋 …そうです。

八雲 あっはっはっは。これは面白い。貴方は作家の才能があると思いますよ。

高橋 荒唐無稽な話だということは十分理解しています。

しかし、私に証言してくれた子どもたちが嘘や作り話をしているようにはとても見えなかった。

先生は本当に何もご存知ではないのですか？

先生は先ほど、呪文が鍵だとおっしゃっていましたよね？

八雲 …これは誤算でした。

まさか「おまじない」の秘密に気づく者が現れるとは。

高橋 じゃあ、一連の都市伝説に先生が関与しているんですね？

八雲 ええ。せっかくここまで辿り着いたので、「おまじない」の秘密を教えてあげましょう。ちなみに、貴方は「おまじない」を試しましたか？

高橋 全ての「おまじない」を試しましたが、何も起きませんでした。

八雲 ふむ。たまにいますですよ。呪文の効果が現れない者が。

この世界との結びつきが強いのか何らかの加護が働いているのか。

貴方が話しを聞きに行った子どもたちも同じような体質だったのでしょうか。

高橋 「おまじない」とは一体何なのですか？

八雲 「おまじない」の手順は何でも良いのです。呪文さえ唱えれば。

この呪文は異世界へ渡るための鍵です。

呪文を唱えれば異世界へ連れて行かれ、この世から存在が消える。

存在しない者の神隠しなんて証明の仕様が無いでしょう？

高橋 何故こんなことを？

八雲 私は異世界から来ました。

異世界と言っても、向こうの世界もこちらと左程変わりません。

大きく異なるのは戦争が起きたこと。すでに終戦していますが、多くの戦死者が出た。

ただでさえ少子化で人口が減少していたのに、このままではあちらの世界では国が滅びてしまう。

高橋 人口を増やすために子どもを誘拐したと？

八雲 こちらの世界でのこの国の若者の死因ランキングをご存知ですか？自殺ですよ。

ここに居ても若者の多くが自ら命を断つことになる。だったら、あちらの世界で有意義に活用した方が良い。

高橋 だとしても、身勝手な理由での誘拐が許されるはずがない。

八雲 親ですら存在を忘れるのに、誰が私を咎めるのですか？

高橋 私がこの事実を世間に公表します。

八雲 誰も信じるはずがないでしょう。

まあ、作品の認知度が上がって「おまじない」を試す子どもが増えるのは好都合なので、ぜひ公表してください。

高橋 …一体どれだけの子どもを誘拐したんですか？

八雲 さあ？正確な人数は私も把握していませんので。

しかし著しい出生率の低下を見ると「おまじない」が上手く広まっているようで実に気分が良い。

高橋 なっ！

八雲 子どもは好奇心旺盛ですからね。

試したくなる「おまじない」の効果と簡単な手順を本に書くだけで神隠しが次々に発生する。

高橋 だから児童文学を？

八雲 効率的かつ順応性の高さから子どもをターゲットにしました。

育成のコストがかかるので、初めは大人を狙ったにですが、連れて行ってもあちらの世界に順応する事ができませんでした。

高橋 誘拐した子どもたちを返してください。

八雲 残念ですが、連れ戻す方法はありませんよ。

高橋 でも貴方はあっちの世界から来たと。

八雲 一方通行なんですよ。私ももう戻ることはできない。

国のために故郷を捨ててこちらに来たのです。

高橋 そんな…

八雲 家族と離れる辛さは私にもわかります。

しかし、あちらの国は制度が充実している。誰も自ら命を断とうとは考えない。

一時的な寂しさを乗り越えれば、幸福な未来が手に入る。

悪くはないと思いませんか？

高橋 どんな理由があろうと私は貴方を許すことはできません。何としてでも罪に問わせます。

八雲 …ふははは。もしかして本気にしましたか？

全部冗談ですよ。

高橋 …は？

八雲 神隠しなんてあるわけじゃないじゃないですか。

高橋さんが本気にするので、つい興が乗ってしまいました。

私は役者の才能があるのかもしれない。

高橋 えっ、でっでも…

八雲 信じられないのであれば、先程の作り話を公表されても構いませんが、一度冷静になることをお勧めします。

高橋 何がなんだか…

そうですね。自分でも何を言っていたのか。

八雲 ふふっ、揶揄って申し訳ありませんでした。

高橋 いえ、こちらこそすみませんでした。

今日はこれで失礼いたします。

八雲 高橋さんが調査された都市伝説には私も興味があるので、もし新しい情報があったらぜひまたお越しください。

高橋 はい。お邪魔しました。

-扉の閉まる音-

八雲 やれやれ。呪文が効かない者は厄介ですね。

放っておいても問題はなさそうですが、危険の芽は早めに摘んでおきましょうか。
さようなら、高橋さん。